

創立50周年記念ビジョン

「エエまちはっしん基地 東大阪」

創造力と夢があふれる
モノづくりのまち

～誇りを持てるまち東大阪～
(イメージ図)



美しさを感じられるまち

文化交流の盛んなまち

魅力ある東大阪J.C
をめざして

すばらしい教育が
できるまち

一人ひとりが
主役となるまち

はじめに

戦後の日本の先人たちは経済復興という大きな目標を掲げ、個人主義の概念のもと国づくりやまちづくりに取り組んできました。その結果、日本は世界でも有数の経済大国となり、物質的な豊かさを実現するとともに、当時の社会から求められていた、経済成長偏重型社会システム(1)を創り出しました。また、右肩上がりの高度経済成長に支えられ、行政が主導となった都市計画が進められ現在の社会が築き上げられてきました。しかし、経済成長偏重型社会システムはひとや自然などとのつながりの中で生きているということを感じられる機会を減らし、個人主義が利己主義に置き換えられるという側面を持ち合わせています。バブル経済の崩壊後、高度経済成長に依存しすぎた行政システムは疲弊し、限界が見えてきました。また、利己主義は自分勝手や行政まかせの考えを生み出し、様々な社会問題を生み出す根源となっています。

地方分権化の流れの中、東大阪市も2005年4月に中核市に移行し、府からの権限委譲などを受け、行政システムが変化してきています。常にいわれていることですが、地域社会の充実が重要であり、今後は住民が主体となり、行政との連携をしっかりと取りながら協働のまちづくりを進めていく必要があります。

住民が主体となるまちづくりを考えると、住民は自分の地域やまちについて関心を持つことから始めていかなければなりません。関心を持つことがはじめのステップとなり、自分と地域のつながり、自分とまちのつながりを感じることができるようになり、どのようにするべきかをともに考え、各々が責任を持って行動することへとつながるのです。人々が常に求める犯罪が少ない安心で安全なまち、緑があふれ、ゴミが落ちていないきれいなまち、大人たちの暖かい眼差しの中で子どもたちが生き活きと遊び成長できるまち、これらは一人ひとりが各々の活動で創り上げられるものではありません。

JCが青年らしい発想と行動力で明るい豊かな社会を実現するには、自分たちのまちは自分たちの力で創造していくことが必要です。まちに関わるすべての人が、自分のまちに関心を持ち、考え、行動し、明るい豊かな社会を実現していく。「エエまちはっしん基地 東大阪」はそんな想いから生まれました。一人ひとりが主役となり「一つのことでもいいから、何か地域のことをしようよ。」という思いと「よっしゃ、やろっ！」と何かを始めるための気概を持ち「誇りを持てるまち東大阪」という目標に向かって発進(行動)しなければなりません。東大阪というまちに誇りを持たせた時、「エエまちはっしん基地 東大阪」として全国に、世界に向けて東大阪の誇りを発信していきたいと考えます。市民、行政、企業、各種団体、教育機関など東大阪に関わるすべての人たちと一緒に、JC運動を盛り上げ地域の活性化につなげていきたいと考えます

1

経済成長偏重型社会システムとは、経済成長に依存し、発展してきた社会システム。右肩上がりの経済成長を見込み、経済的な負担を先送りしてきた。経済成長が続いているときは、先送りされてきた負担は問題なく消化されるが、経済成長が停滞・下降した時に先送りによるひずみが表面化する

「誇りを持てるまち 東大阪って？」



一人ひとりが主役となるまち

東大阪市では、自治会の加入率も81.4%と他市に比べても高く、ゴミの収集や、愛ガード運動など、行政だけでは解決できない問題に対して、市民が率先して行政に協力するといったかたちで様々な問題に取り組み、地域の住民同士のつながりを強めてまいりました。また、JICがこれまで50年間の歴史の中で行ってきた社会開発運動の一つとして昭和46年に市民公開討論会を開催し、「市民会議の開催や緑化運動の展開、公害防止条例の制定・市民祭りの開催、市民憲章の作成」といった5つの提言を行いました。その中の市民会議では、その後30年間開催を続け、多くの市民や各種団体が集う会議となり、時代に合わせた問題について、話し合い、提言書としてまとめられております。また市民によって組織されたふれあい祭りについても本年度で30年を迎え、この祭りに関わる人も年々増え、市民自らが提案した事業を市民が主体となって計画し、実行しつづけているという他市に比べても例の少ないすばらしい事業へと成長してまいりました。

地域のつながりが希薄化したといわれる現在の社会において、今後も、河内特有の「おせっかい」や「かまう」といった東大阪人の気質を大切に、ひととひと、ひとと地域のつながりをこれまで以上に強固なものにし、さらに発展させていくことが、これからのまちづくり運動に必要なだと考えます。

住民が主体となるまちづくりを進めることで、自らが創り上げたまちであるという意識が芽生え、自分たちのまちとして「誇り」が持てるのです。このまちに住むすべてのひとの明るい未来のためにまちづくりを進めていく必要があります。

すばらしい教育ができるまち

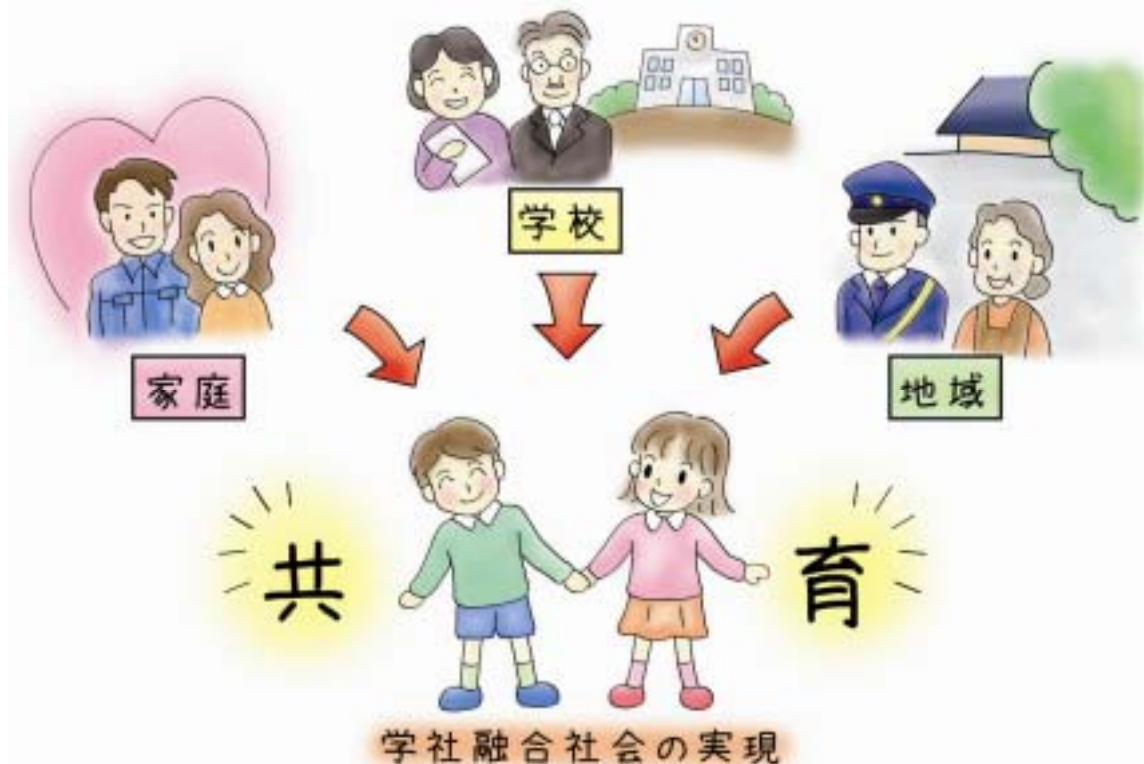
教育は社会の価値観を決定する最も大きな要素であり、人間は生涯にわたり教育を受け成長していきます。教育とは家庭教育、学校教育、地域社会教育の3つが連携して効果を発揮するものであり、共育(きょういく)という造語があるように、人に教えるためには、まず自分自身の行動を見つめ直し伝えていく必要があります、それはお互いが成長する機会となります。

地域社会教育に関しては「C」として最も積極的に取り組むべき課題であり、とりわけ吸収力の高い青少年時代に養われる価値観は重要であると考えなければなりません。家庭の教育力の低下が叫ばれる現在、地域の子どもをわが子のように考え、愛を持って育てる地域社会の重要性は益々高まっています。また、「C」運動の大きな目的のひとつである「ひとつづくり」とはまさに教育によって成しえるといっても過言ではありません。特に小学校において、過去の継続的な取組の成果が実り、「C」の認知度は非常に高まっていると感じます。今後も学校との連携をしっかりと取り、子を持つ親として、地域の大人として、今子どもたちは学校で何を学んでいるのかを知り、郷土の特色や日本の魂^{こころ}を伝えることで地域やまち、国を愛する心を育てるとともに、礼儀作法や思いやりの心、協調性の大切さを伝え、子どもたちが心豊かに成長するよう積極的に取り組んでいきましょう。この運動を継続的に実施することで教える側も教えられる側もまちの特色を知り、まちへの「誇り」が芽生えることでしょう。まちへの「誇り」が芽生えたとき、その心はさらに大きな国や地球を愛することへとつながると信じています。

学社融合社会(2)を実現し、学校、地域、家庭が次代を担う子どもたちの“輝ける姿”とは何かをともに考え、すばらしい教育ができるまちを創造します。

2

学社融合社会とは、より高い教育の成果を得るために、学校教育と社会教育がそれぞれの役割分担を前提とした上で、そこから一歩進んで学習の場や活動など両者の要素を部分的に重ね合わせながら一体となって子どもたちの教育に取り組んでいこうという考え方です。



美しさを感じられるまち

太古より地球はかけがえのないものであり、青い空や海、緑の大地、そこに生きる様々な動物や植物、そしてひと、これらすべてが役割を持ってこの地球に存在しています。とりわけ、日本には四季がありそれぞれの季節を通して自然のすばらしさを感じることができます。また、自然災害に見舞われることもあり自然への脅威を感じる一方で悠久の自然への畏敬の念が生まれ育まれてきたのです。このような風土の中から「自然に対する繊細な感受性」を持った情緒が生まれました。そして、この情緒をもとに、茶道・華道などの様々な「道」が生まれ、「美」や「礼」を重んじる日本独特の文化につながっているのです。

テクノロジーは我々の生活を豊かにしてきました。しかしその反面、地球の資源を消費し、自然を破壊し、大気汚染を起こすなどの様々な環境問題を引き起こしています。近年の環境破壊の勢いは凄まじく、このままでは伝統的な情緒や文化を育んだ大切な自然が、根幹から破壊されかねないとの危惧さえ持たれます。今一度、環境は自分たち一人ひとりで守るんだという意識と自然に対する美への感性を持つことが求められています。環境を大切にする気持ちを育むために、身近な環境をよくすることに率先して関わり、自然との共生を考え、身近な環境を良好な状態に保ち、環境は自分たち次第で変わるんだという意識を持つことが必要です。環境問題は、非常に大きな問題であり、小さな取り組みの積み重ねが、地域全体、ひいては、地球規模での取り組みにつながるのです。また、古来より受継いできた美への感性を改めて磨き、自然環境への畏敬の念を持つことは、環境への意識を違った面でも向上させます。そうすることで、一人ひとりが自ずとまちを大切にしたいと考え行動した結果、良好なまちの環境が整ってはじめて、まちに「誇り」を持つこととなるでしょう。

我々は、地域の大人として、子を持つ親として、社会起業家（ 3 ）として、環境問題についての意識を高め、また、まちの人々が環境を大切にする気持ちを育めるように取り組んでいく必要があります。自然の美しさを感じ、自然に感謝する大切さを伝え、美しさを感じられるまちを創造していきます。

3

社会起業家とは、地域や社会の問題を自分たちの課題として捉え、新しい発想で取り組み、いわば公共サービスに変わる新しい仕組みを生み出す人を言います。地域や社会の課題の解決を政府や行政に依存するのではなく、自ら社会的な課題への取り組みをビジネスとして行い社会的意義ある商品・サービスを生み出す人のことです。



四季を通じて
自然のすばらしさを
感じるまち



創造力と夢があふれるモノづくりのまち

東大阪市の特色が「モノづくりのまち」といわれる所以は、高度で独自の技術力を持つ企業が集積するまちであるからです。原子力発電所や明石海峡大橋など国内の主要な建造物や乗物に利用される「さびないネジ、緩まないネジ」、多くのトップアスリートが利用する眼鏡などに利用される「偏光ガラス」など国内や世界においても非常に高いシェアを誇る製品が数多く存在します。これらはまさに、まちの「誇り」であります。しかし、これらの製品・技術・企業のことを深く理解し、「誇り」として認識している市民は少ないと考えられます。したがって、今後の活動で必要なことはＪＣが中心となり行政、教育機関、企業、市民などとの連携を強化し、地元住民が高い技術を持つ東大阪の企業への理解を深め、我々のまち東大阪はすごいまちなんだと「誇り」が持てるようにしていくことが必要です。市民が地元企業の製品・技術への理解を深め、「誇り」を持つこととなったら、自ずと国内はもとより海外にも広く伝えていくことが可能となるのです。また、モノづくりのすばらしさを子どもたちに伝え、創造力を育み、このまちで働くことへ夢を感じさせ、東大阪のすばらしさを認識し、「誇り」を持って東大阪で働く人となってもらうような育成システムをつくっていかねばなりません。将来の人材を育成し、東大阪の企業の発展をサポートしていくことは、我がまち、そして日本の発展につながることでしょう。そのためには、ＪＣは地域や関連団体とのコーディネーターとしての役割を重視し、連携が上手くいくようなシステムをつくっていかねばなりません。

「誇り」を高め、「モノづくりのまち」をさらに東大阪のシンボルへと発展させることで、創造力と夢があふれるモノづくりのまちを創造していきます。

文化交流の盛んなまち

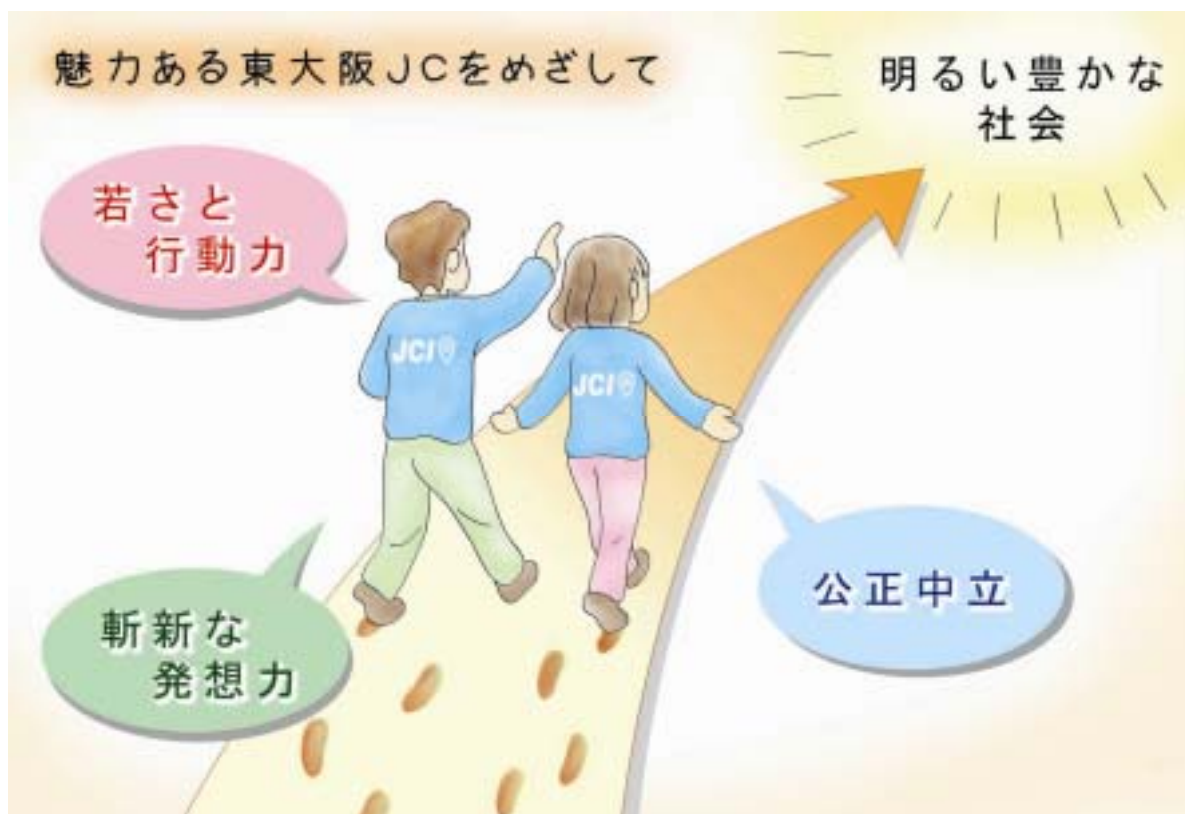
2002年から学校教育に「総合的な学習の時間」が本格導入され、そのなかでも国際理解が重要な学習課題となっています。第15期中央教育審議会答申は、「異なる文化を持った人々と共生する資質や能力の育成を図ること、日本人としての自己の確立を図ること、外国語能力の基礎や表現力等のコミュニケーション能力の育成を図ること」の3点を掲げています。

まちに対しての「誇り」は、他の地域の人々と交流を通して持てるものであります。文化とは歴史的なものから、現在の地域特性や今も引き継がれている風習などがあります。「誇り」を持つということは、自分の住んでいるまちに多くの文化があることを理解し、それらの文化が自分を育ててくれたのだと認識して、まちを愛することから始まります。そして、その理解は他地域のひととコミュニケーションを取ることにより差異を認識し、自分が育った場所の地域性を理解することとなるのです。すなわちひとはコミュニケーションをすることで互いの違いを知り、己を確立し、他者を理解できるようになるのです。

東大阪の新旧の文化的、歴史的な地域資産、脈々と受け継がれてきた地蔵盆、布団太鼓、だんじりなどの伝統的な祭り、モノづくりのまちとしての地域特性を地域固有のまちの宝物として、我々や東大阪市民が大切に、そして他地域に誇れる財産として次世代に受け継がせていきましょう。

東大阪には、50カ国を超える2万人の外国籍の人、5つの大学の留学生と、全国40万人以上の都市では、大阪市に次いで2番目に外国人登録者の割合の高いまちです。この国際色豊かな恵まれた環境を活かして、国家レベルで解決できない問題を、民間レベルの文化交流から相互理解を深めることで解決していけるのではないかと考えます。また海外の諸都市との交流を通じて、文化交流を推進することで、お互いが国際的な視野を養うことができ、JICの3信条のひとつ世界との友情を育み、世界恒久平和につなげたいと考えます。





魅力ある東大阪JCをめざして

50年というすばらしい伝統の中、常にJCは「明るい豊かな社会」を実現するために運動を展開してきました。そしてこれはこれからも変わることのない大きな目的です。JCが持つ特質である、若さと行動力、公正中立、単年度制による斬新な発想力などを活かして、時代とともに変化する「明るい豊かな社会」を創造していかなければなりません。

JCの魅力とは、たのもしい人が生き活きと集う組織であり、人間力開発こそ最重要課題と掲げていることであると考えます。そのためにまちに飛び出し、積極的に市民との関わりを持つことが必要です。また、JCだけでまちづくりをすることはできません。様々な団体と連携を取り、個々の力をさらに大きな力へと変え、まちづくりを進めていく必要があります。積極的にまちへ飛び出しましょう。そこには新たな人間力が発見できることでしょ。

公益を目的に運動する我々にとって、例会や事業など一つ一つについて、再度事業目的を整理し、組織進化についても積極的に取組んでいかなければなりません。また情報技術の革新的な進歩は、我々がめざす住民主体のまちづくりにとって重要な鍵となる可能性があります。人々の関心を高めるために、我々がさらに発展するために情報が必要であり、様々なネットワークを活用し信頼できる情報を収集し、我々、そして東大阪市民が活用できる情報を発信していきましょう。地域社会ネットワークの中心にJCが存在できるからこそ、JCメンバーであるという「誇り」が持てる組織であり続けられるのです。これからの地域社会には核となる「人」が必要です。リーダーシップの育成を行うJCの必要性は、ますます重要なものとなると考え、魅力あるJCを創造し、「誇りを持てるまち東大阪」の実現をめざします。

JCの組織は言うまでもなく人の集まりです。そしてJCは発足当初から時代に合わせて組織進化をしてきました。先人達が築きあげてきた50年の歴史から受継いだものを大切にしながら、未来に向かって熱意ある青年経済人が多く集えるような組織に絶えず進化していきます。

「工工まちはっしん基地 東大阪」をめざして 東大阪JC 創立50周年からの運動



「公の心を育むひとづくり」運動をはっしん



住民と行政が協働したまちづくりを進める際に重要な点は、地域の住民自身が、また行政が相互に自立し、対等な関係で、お互いの責任や役割分担を果たすことが重要な条件です。協働のまちづくりを進めていくにあたり、まず日常生活や身の回りで発生する諸問題については、まずは自分たちの手で解決していく。それが解決できない場合は、地域のコミュニティで解決する必要があると考えます。地域に関わるすべての人、コミュニティには地域住民だけでなく、企業市民、自治会、学校、各種NPOなどが存在します。この地域に関わるすべての人が「自分たちの手で問題を解決していくんだ。」という他人まかせにするのではなく、各種機関それぞれが自分の役割を果たす社会、公の心を持たなければなりません。」JC運動の一つである「公の心を育むひとづくり」運動を地域で進めていきましょう。

これまでの市民会議は毎年行われていますが、地域内分権を進めようとするこの時代においては、東大阪市51万人都市全体の問題において会議を行うことには限界があるのではないかと考えます。現代の多様な価値観を満たすため、個々のニーズに対応するには、もう少し小さなコミュニティでの協議の場が必要ではないかと考えます。東大阪市の基本計画には、地域内分権として構想し、7つに地域割りしたリージョン（コミュニティ）があります。各リージョンには、リージョンセンターがすでに建設され、行政サービスセンターや会議室、ホールなどコミュニティを育むのに最適な場所が完成しています。これらの資産を活用し、これからは各地域において地域住民、自治会、教育機関、企業、各種NPOなどと行政がお互いに連携できるシステムの構築を進める必要があります。我々JCが率先して、住民が参加しやすい状況や場所などの機会づくりをする必要があると考えます。しかし、場所、人、組織が集まっても目標がなければまちづくり運動は進みません。5つの提言の中の一つ「市民憲章」は、現在も策定にはいたっておりませんが、1991年に宣言された「ラグビーのまち東大阪」は、ラグビー精神にのっとったまちづくりをめざすために、東大阪市民の共通したシンボルとしての役割を果たしてきました。先輩諸兄の情熱あふれる運動展開の結果、「ラグビーのまち」というキャッチフレーズは、世代を越えて多くの市民に広く認知されるようになりましたが、次のステップとしてラグビー精神が謳う東大阪市民のあるべき姿を市民が共有する必要があるのではないのでしょうか。そのためには、ラグビー精神のように力強く、清々しい市民の心の礎となる「市民憲章」を市民自らの手で策定していく運動の展開が必要です。

ふれあい祭りのように住民が自ら主体となって計画の立案、決定を行い、実行できるといった住民参画のまちづくりを進め、「ラグビー精神」そしてさらには地域ごとの7つの「誇り」を他の地域に向けて発信しましょう。



一子多親運動をはっしん



家庭や学校だけで子どもを教育するという風潮の中、核家族化、少子化、離婚率増加が進み、家庭や学校だけでは子どもを教育し難い情勢となってきました。また教育すべき親自身が礼儀作法や協調性を失っている場合があるといっても過言では無い状況です。家庭や学校だけでできないのであれば、地域全体で関わって子どもを育てる必要があるのではないかと考えます。

2006年から日本JＣとの「協働運動」(4)の一つとして「倫理・道徳教育における協働運動」が始まりました。今、あらためて日本人が昔から培ってきた道徳心を子どもたちに伝えていくことは、私たち大人のつとめであります。郷土の特色や日本の魂を伝えるための様々なプログラムを作成し、学校教育だけでなく、地域の催しやPTAや子供会関係の事業など、各種の団体と連携を取りながら、多くの機会実践していきましょう。子どもを教育することは、自分も学ぶ機会となります。高校生、大学生が小学生や中学生を教えたり、また地域の大人が子どもを教えたりと世代間の交流事業を行うことで、大人も子どもも共に学べる機会が得られるのではないかと考えます。またマナーの向上を学ぶ機会や、スポーツや文化を通じた事業を各種団体と連携を取り合っ行って、協調性・教養を高める機会を作ることも必要だと考えます。

学校に関心を持ち、学校だけでは学ぶことのできない内容については、地域のすばらしい人材を学校の授業に活かすためにも「地域人材バンク」(5)の構築や「コミュニティカレッジ」(6)を継続して進めることが重要です。さらには学校教育と連携し、「日本一、算数や理科ができるまち」や、「日本一、基礎体力のあるまち」などのように、特色のある教育を実践することで、東大阪卒業の子どもたちが、たくましく誇りを持って巣立つ、地域の大人全員が我が子のように子どもを見守るすなわち「日本一、人が育つまち」、そんな東大阪を他の地域に向けて発信します。

4

「協働運動」

日本青年会議所と全国各地の青年会議所が、運動の方向性(ベクトル)を合わせて取り組む運動。2007年度では、アニメ「学の夏休み」を題材として小学生を対象にした倫理・道徳教育推進運動の展開、アニメ「誇り」を基にして確かな歴史認識を伝えるプログラムを活用した近現代史教育推進運動の展開、真の自立国家をめざすためのローカルマニフェストや公開討論会の更なる普及を目的にした運動。

5

「地域人材バンク」

仕事や趣味で様々な知識や技術、特技、経験を身に付けた方を、生涯学習講師・指導者として、講師・指導者の紹介を希望する方(学校、市民、団体など)の要請に応じて紹介、あっせんできるように、登録した人材バンク。

6

「コミュニティカレッジ」は創立35周年に提言されたビジョンで、40周年、45周年のビジョンにも引き続き提言されている。子どもから老人までの生涯教育に着目し、市民の心のふれあいの場の提供として構想された。過去には、空き教室を利用し、JＣメンバーが学校で授業を行う「スクールジャック」事業や、高校生対象に郷土教育を目的として、地域の企業の社長が学校で授業を行う「コミュニティスクール」事業が行われた。





地球元気運動をはっしん



市街化された地域の中での緑化推進や打ち水運動などは、ヒートアイランド現象への予防につながります。環境にやさしい代替エネルギーへの変換を推進することは、CO₂排出の削減、大気汚染防止への第一歩となり、傷ついた地球を元気にする第一歩になると考えます。

私たちは生活していく上で必ずゴミを出しています。しかし、「MOTTAINAI」(7) をキーワードにしたゴミを出さない工夫、出ってしまったゴミの処分方法などにより、地球の傷つき方は変化します。ゴミひろい運動、S t o pポイ捨て運動などの身近な運動を進めて行き、環境に対する意識を芽生えさせ、マナー向上を行いましょ。市民一人ひとりが意識を持つことで、環境への負荷がずいぶん低減されるのです。しかしこれらの運動は、一人ひとりが進めていくことが大切なのですが、環境に配慮した運動を行っていることの実感にくいのが欠点です。そこで、一日限定や週限定など一斉にひとつのこをを行うなど、全市一斉に全市民が効果を実感できる活動を行い、環境問題への意識啓蒙運動をすすめましょ。

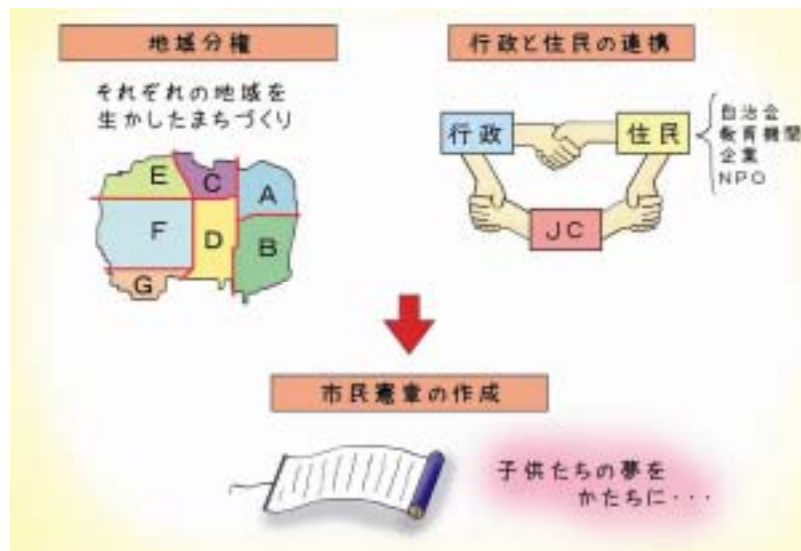
東大阪には生駒山麓を中心に多くの自然が残っています。また、コンクリートに囲まれた川が玉串川や長瀬川などのように親水空間や遊歩道が整備され、自然を感じられるようになったり、より自然に近いように整備された場所が増えてきました。伝統的な季節行事であるお花見や春事などの自然を大切にきた昔の文化や行事を見直し、大人から子どもまでが「美しさ」への感性を磨きましょ。感性が磨かれると、「みっともない」、「はずかしい」、「きれいじゃない」といった感性が生まれ、マナー向上へとつながり、環境に配慮した取組みにもつながることでしょう。

この運動により地球を元気にし、大阪府中に、全国に、世界に発信していきましょ。

7

「MOTTAINAI」

1993年以来、日本青年会議所が世界的に展開してきた「もったいない運動」。(1)地球環境にやさしい、(2)持続可能な、(3)社会通念において道徳的に賛同される「物」や「考え方」を改善することにより、現在の公害問題や自然破壊など様々な問題を解決していくことを目的としている。この運動に共感したノーベル平和賞受賞者のワンガリ・マータイさんが「MOTTAINAI」(もったいない)を世界に提唱し、地球環境を守る世界共通語として広く使われている。



夢を実現できる東大阪人をはっしん

東大阪市においても、バブル経済崩壊以降は、事業所数、出荷数、従業者数ともに減少傾向を強め、空洞化現象がみられます。また平成17年に実施された企業向けのアンケート「高井田の素顔」(8)では「操業環境に障害を感じる企業が多い」や「企業と地域の接点が少ない」「地域の将来像が、未共有、地域のルールが未整備」などの結果がでており企業の操業困難な状況が考えられます。これからも、東大阪が「モノづくりのまち」として発展していくには、企業が操業しやすい環境に整える必要があります。企業や住民へのアンケートを実施し、都市計画への提言が必要ではないかと考えます。そして、企業にも企業市民として地域のまちづくりに参加、貢献していただけるような仕組みをつくる必要があると考えます。

東大阪が「モノづくりのまち」といっても、どんな製品を作っているというのはあまり知られていない状況です。自分たちのまちが「モノづくりのまち」として知られていることはマスメディアなどを通じてわかっていますが、実際に何を作っているかがわからない状況にあるといえます。したがって誇りを持っていないのです。そこで、東大阪が何を作っているのか、全市民が知っていくことが必要だと考えます。我々も含め、まちの人がまちに誇りを持つためにも「モノづくりのまち」をもっと理解し、他地域にその誇りを発信できるようにしましょう。

例えば東大阪市全体が、モノづくり博物館となるような運動。そしてモノづくりから、発想する楽しさ、形にする楽しさ、1から10までの工程を行うことによる達成感による喜びを感じられるような事業を通じて、モノづくりのすばらしさを伝えたいと考えます。モノづくりのまちの利点を活かしコミュニティカレッジの推進やデュアルシステム(9)の充実を行い、物を考えさせる力、アイデアや発想力を鍛えるための「匠の技や魂」を次世代に継承し、夢を実現できる人が多く集うまちを発信していきましょう。



「高井田の素顔」～企業アンケートから見る地域の現状と課題～平成17年3月発行。個々の企業を地域資源としてとらえ、安心して操業できるような地域の相互理解を育むためのまちづくり活動の第一歩として、地域の資源及び課題を明らかにすることを調査目的とする。発行・調査主体：大阪府総合計画課、東大阪市経済企画課

デュアルシステム（日本版）

厚生労働省が就職活動を続けているが安定的な就業につながらない者、就職に向けて職業訓練を受ける意欲がある者、具体的には、学卒未就職者、無業者、フリーター等を対象に推進し、平成16年4月から日本版デュアルシステムがスタートする。日本版デュアルシステムとは、「働きながら学ぶ、学びながら働く」ことにより若者を一人前の職業人に育てる新しい職業訓練システム。具体的には、企業における実習訓練と教育訓練機関における座学（企業における実習訓練に関連した内容）を並行的に実施。



東大阪の再発見 人を惹きつけるまちをはっしん



東大阪には旧跡や偉人などロマンを感じることができる地域資産がたくさんあります。それらの存在と歴史を正しく伝えられる人材を育成し、後世に伝えていく必要があります。東大阪JCでは、昭和52年の創立20周年の時には東大阪の歴史を出版物にした「かわち野」や、平成14年の創立45周年の時に郷土の宝物を伝えるツールとして作成した東大阪創作かるたがあります。本年度では、創立50周年の記念事業の一つとして地域の子どもたちに、もっと東大阪の歴史や素晴らしい文化を「地域のたからもの」として伝えたいという思いから、郷土映画「ナノハナ」を制作しました。これらのツールを活用したプログラムの実施や、おじいちゃん、おばあちゃんなどの地域の大人たちが、古き良き文化や伝統を子どもたちに継承できるような事業を通じて、東大阪に住む人たちが、まずまちの魅力に気づくところから始めましょう。

東大阪はいろいろな国際的な他文化との接触が容易なまちでもあります。今後は、東大阪在住の外国籍の方との交流事業や、外国籍の方が参画しやすいまちづくりが必要ではないかと考えます。また本年度で40年あまり、台中JCと姉妹交流をしてきましたが、今後はメンバー間での交流だけでなく市民や企業を巻き込んだビジネス交流や、子ども同士の国際交流などの取り組みが必要です。そして今後は台中だけでなく、私たちのまちにとって有益な都市、特にアジアの国との交流が必要ではないでしょうか。アジア全体の文化の発展をめざすこと。アジア各国とともに発展することは世界平和にもつながることでしょう。

文化・歴史・産業などの個性のあるまちは人を惹きつけ、人が集まれば交流につながります。人・モノ・情報が交流するまちは、いずれ新しいビジネスチャンスにもつながります。人を惹きつけるまちとなるように、自分たちのまち 東大阪を再発見し、素晴らしい文化を発信していきましょう。



まちに飛び出し、まちとともに成長を

魅力ある Jaycee をはっしん



我々が魅力ある、たのもしい人となるためには、多くの学ぶ機会が必要です。組織を通じて、事業、研修や交流により更に成長できるものと考えます。JCIや日本JCへの出向を通じて、またJCだけでなく、まちの各種組織に出向して武者修行を積むことは、必ず自分を大きくしてくれます。積極的にまちに飛び出し自己の確立につとめましょう。

JCがたのもしく、魅力ある人が多く集う組織となるためには、今後はより一層公の精神を重要視して運動を行っていかねばなりません。また、まだまだ少ない女性メンバーの増加を促すことは、男女共同参画の社会においても魅力的な組織となることでしょう。多くの志を持ったメンバーを募り、組織を拡大することは組織力の強化につながっていくと考えます。また、我々の法人格も時代と共に変化を強いられるかもしれませんが、一貫した我々の意識、志を貫ける形で組織を発展させていくことをめざします。

JCが魅力ある組織となるためには、これまで以上に行政、自治会、教育機関、企業、各種団体などまちの多くの方々との連携が必要となり、情報交換・情報共有をすることは、我々が活動を行う際にとっても重要となります。今後は各種団体や、多くの関係者との連絡・連携できるようなシステムの構築が必要だと考えます。

今後我々が行う運動や活動により、我々も成長し、まちの人と一緒に成長できるような運動や活動が必要だと考えます。まちの人とともに成長すれば、理想のまち東大阪が実現できることでしょう。Jayceeが若きリーダーとして、英知と勇気と情熱を持ってJC運動を展開し、市民に一石を投じ、気づきを与えられる、まず市民の意識を変革していくことから始めることが重要です。市民意識変革運動をJC運動の大きな柱の一つとして掲げ、「誇り」を持てるまち東大阪の実現をめざします。魅力ある、たのもしい人が多く集うまち、東大阪を発信しましょう。



誇りを持てるまち東大阪をはっしん



ラグーマンの聖地、花園ラグビー場を有する「ラグビーのまち」は全国にも知られています。しかし、「ラグビーのまち」が東大阪であることや、「ラグビーのまち」に込められた真意は浸透していないのではないのでしょうか。タックルのたくましさ、スクラムの連帯性、ノーサイドのすがすがしさや思いやりに加え、東大阪が「日下の江」(10)と万葉集にうたわれ、河内という海があったころから、渡来の文化を吸収し自分たちの文化に変えていった柔軟性と創造性、そして河内平野を南北に流れ、洪水を繰り返していた大和川の付け替えを行い、広大な土地に河内木綿の文化を発達させた根気や先見性など、河内のくにの人が持っていた気質を加えた意識を市民に醸成することが、今後の我々の使命だと考えます。

まちへの関心を高めることにより、様々な気づきが生まれ、自分に何ができるかを考え、たくましく行動する。まずは自ら「発進」することから始まります。最初はほんの小さな力かもしれませんが、しかし、いくつもの小さな力が重なり、地域やまちの力となるのです。そして、自らの力によって創り上げられたまちは「誇り」が持てるまちとなります。まちへの「誇り」は「発信」につながり、「発信」はさらに新たな「誇り」を生むことにつながるのです。

ラグビーは、後ろにパスを出しながら前へ前へと進んでいきます。このパスこそが、次世代の担い手である子どもたちに東大阪の「誇り」というボールをパスしながら理想のまち「エエまちはっしん基地 東大阪」を実現しようとする我々の運動そのものであると考えます。

「One for All All for One」という公のこころを、東大阪の「誇り」を、全国へ、世界へ向けて「はっしん」していきましょう。

10

奈良時代、河内平野の北部は、大阪湾からの入り江が生駒山麓まで達し、日下の江と呼ばれて万葉集にもうたわれている。「草香江の 入江に求食(あさ)る 蘆鶴の あなたづたづし 友無しにして (巻四575, 大伴旅人)。」『万葉集』で「草香江」が登場する巻四の序詞である。蘆鶴(あしたず): 葦の間にいる鶴のこと。鶴の異名。



参考文献

- 「東大阪市の輝かしい21世紀をつくるために」 東大阪市まちづくり推進協議会
- 「高井田の素顔」大阪府総合計画課 東大阪市経済企画課
- 「アジアのにぎわい都市・大阪ビジョン」大阪府にぎわい創造部国際室アジア交流課

「エエまちはっしん基地 東大阪」

～誇りを持てるまち東大阪～ 行動指針

ひととひと、ひとと地域のつながりが強固

